

武道文化論 改訂版

Toshinobu Sakai

2026

日本武道の歴史

目次

古代の武	4
古代の相撲	4
原始信仰と武	4
あめのぬぼこ <u>天沼矛</u>	4
ふつのみたまのつるぎ <u>節 霊 剣</u>	5
くまなぎのつるぎ <u>草薙剣</u>	6
にぬりや <u>丹塗矢</u>	7
中世の武	7
武士の出現と武術	7
日本刀の出現	8
中世の武を主導した弓	9
騎射の訓練	9
槍の台頭	10
鉄砲を捨てた日本人	10
武士道	11
修 行	11
流派の成立	12
近世の武	13
剣が主導した近世の武	13
剣術流派の三大系統	14
武の芸道化 — かた（形・型）	15
剣 豪 宮本武蔵	16
『五輪書』と『兵法家伝書』の心法論	17
活人剣思想	18
武道における二つの心 — 禅と儒教の影響	19
武士の嗜みとしての武道	20
しない打ち込み剣術の登場	20
いっさいちよざん <u>伏斎樗山</u> 「猫の妙術」 — 生涯武道 —	21
しない打ち込み剣術の隆盛	21
江戸三大道場	22

剣術の競技化 ー大石進事件ー	22
三十三間堂の通し矢競技	23
講武所	24
近・現代の武	24
武士階級の崩壊と武道の危機	24
撃剣興行	25
やまおかてっしゅう <u>山岡鉄舟</u> の剣術修養論	25
嘉納治五郎の柔道が主導する近・現代の武道	26
嘉納治五郎の女子柔道	27
大日本武徳会の設立	27
戦時下の武道	28
太平洋戦争後の武道の禁止と復活	28
新しい武道の誕生と導入	29
現代グローバル社会における武道	30

古代の武

古代の相撲

古代の武については資料が少なくわからない部分が多いが、神話に描かれている記述を手がかりに知ることができる。日本神話は『古事記』や『日本書紀』といった文献に記されている¹。

まず最も原始的な格闘技として相撲が登場する。

記紀神話のなかに、建御雷神^{タケミカヅチノカミ}と建御名方神^{タケミナカタノカミ}が力くらべをしたことが記されている。これが相撲の始まりといわれている。この伝承は国譲^{くにゆず}り神話といわれるもので、天上界から下界を支配する神に国土を譲るように交渉しにきた使者であるタケミカヅチと、これに抵抗したタケミナカタの戦いである。

他に相撲にかかわる神話で有名なものが、『日本書紀』に記されている当麻蹶^{タイマノケハヤ}早^{ノミノスクネ}と野見宿禰^{スニ}の戦いである。これは垂仁^{すいにん}天皇の命令によって行なわれた戦いであり、天覧相撲（天皇の前で行なう相撲）の最初であるとされている。しかし、この戦いは互いに蹴り合い野見宿禰が強力を誇っていた当麻蹶早の腰を踏み折るという荒々しいもので、現在の相撲とは戦いかたの様相がかなり違う。

原始信仰と武

『古事記』や『日本書紀』には相撲のほか、矛や刀剣、弓矢についての描写もある。しかしこれを使っている様子は非常に簡単な記述にとどまり、相撲と同様に技術的には稚拙なものであったと予想される。

技術的には稚拙であるが、古代の武は宗教とかかわっていたところに大きな特徴がある。宗教といっても後に神道といわれるもので、キリスト教のイエス・キリストや仏教の釈迦のようにカリスマ的な人物が教義を広めたものではなく、自然神や祖先神への崇拝を中心とした自然発生的な土俗信仰であり、いわゆる原始信仰といわれるものである。特に古代の武器は、呪術的な原始信仰と大いにかかわりをもっていた。

あめのぬぼこ 天沼矛

古代神話に登場する金属製の武器には刀剣や矛がある。刀剣のうち片刃のものを刀といい、両刃のものを剣といって区別する。武器としては刀が使われる場合が多かったようで

¹ 日本神話は、そもそも古くは口伝で語り継がれてきたものであるが、文字として記されたものとしては、8世紀初頭に著された『古事記』や『日本書紀』の神代紀に見ることができる。『古事記』は、天武天皇の勅により語り部であった稗田阿礼^{ひえだのあれ}が誦習（よみならい）したものを太安万侶^{おおのやすまろ}が元明天皇の命により撰録して和銅5年（712）に献上した日本最古の歴史書である。『日本書紀』は、六国史の一つで、朝命により舎人親王^{とねり}らが720年（養老4）に元正天皇^{げんしょう}に奏上した歴史書である。両書とも、朝命により編纂されたものであることから、皇統の正当性をオーソライズする政治的意図は明確であり、これを踏まえた上での解釈が必要である。

あるが、信仰とのかかわりで神聖なものとして崇められてきたものは全て剣である。これは金属器のルーツである中国大陆において既にそういった捉え方がされていた。古代中国の原始信仰である道教において、剣は呪術の道具であり祭器であった。

この両刃の剣に長い柄をつけたものが矛である。

まず記紀神話のなかで最初に登場する武器は、矛である。^{アメノヌボコ}天沼矛^{フツノミタマノツルギ}といい、イザナギとイザナミという天の神々がこの矛をつかって最初の国土を生んだとされている。神々の呪術にかかわる描写である²。

しかし、矛はその後の神話のなかで重要な役割を担って描かれることは少ない³。この神話では、天上界と地上の隔たりを表現するために長い柄のついた矛が登場したとも考えられる。

^{フツノミタマノツルギ}師霊剣

剣は神話のなかで非常に重要な役割をはたす。日本神話のなかには^{フツノミタマノツルギ}師霊剣^{クサナギノツルギ}と草薙剣という二つの代表的な霊剣が登場する⁴。

師霊剣はそれ自体が神として描かれる。国譲り神話で使者として下界を平定した神、タケミカヅチがそれである。タケミカヅチはオオクニヌシに国を譲るように求めた際、剣を浜辺にさかさまにさしてその切先の上に座り交渉をする。その後、相撲の起源とされる息子タケミナカタとの戦いで、タケミカヅチの手が剣に変化している。こういったことからこの神は剣の神とされている。

剣の神タケミカヅチは、初代天皇といわれる神武天皇の伝説の中で重要な役割をはたす。神武（カムヤマトイハレビコ）が天皇として即位する前のこと、西国の日向から東へ東へと国土を平定していく途中、熊野の地で荒ぶる神の毒気に当たり彼はその軍隊もろとも倒れてしまう。これを天上界から見ていたタケミカヅチが助けたのであるが、その方法がユニークである。タケミカヅチは自分は天上界にいたまま、持っていた聖なる剣を下界に降ろし、その霊力によって神武を助ける。この時、神武はこの剣で敵を斬ったのではなく、一説によると、この剣の霊力によって荒ぶる神は自然と斬り殺されていたという。この剣、実はタケミカヅチが国譲り神話のときに使った剣であるといい、名を師霊剣という。

神武はその後、国土統一をはたし、初代天皇として即位する。それもタケミカヅチ神の助けがあつてのことで、彼は感謝の気持ちからタケミカヅチを東国の鹿島にまつた。皇

² イザナギとイザナミの二神は、天の浮橋という天空の橋の上に立ち、天沼矛をさし下ろして下界の海中をかきまわした。引き上げた矛の切先から滴り落ちた塩が積もってオノコロ島になったという。これが国土のはじまりである。至ってマジカルな描写であり、神々の呪術行為として解釈することができる。

³ 『日本書紀』（本文）には、国譲り神話において、大国主がタケミカヅチとフツヌシの二神に平国の廣矛を授けたことが記されている。

⁴ 師霊剣と草薙剣に^{ツツカノツルギ}十握剣を加えて古代三大霊剣とする学説があるが、間違いである。十握剣は握り拳十個分もある立派な剣という意味で普通名詞であり、テキストによっては「十拳剣」や「十掬剣」などとも表記される。固有の名称をもつ代表的な霊剣は師霊剣と草薙剣であり、これを古代二大霊剣という。

紀元年、即ち紀元前 660 年の頃といわれている⁵。それが鹿島神宮である。鹿島神宮では、現在でも劔靈劔をタケミカヅチ神の象徴として大切に扱っている⁶。また、鹿島の地では、鹿島神宮を中心に古くから劔靈劔の神術を伝えるものとして武術が盛んであり、現在でも武の聖地となっている。

草薙劔

二大靈劔のもう一つ、草薙劔は、現在でも三種の神器⁷の一つとして古来天皇家に伝えられ、天皇の位の象徴として日本社会のなかで重要な役割をはたしている。

古代の天皇は呪術王であり、祭りによって神々と交信し、除災招福や五穀豊穰をもたらす役割を果たしていた。その際に使用した道具が劔と鏡と勾玉であったと考えられる。これを祭器というが呪術儀礼において重要な道具であったこの三つの宝は、自然な流れとして次の天皇が譲り受け、こういった慣習が制度化し、現在にまで代々引き継がれてきた。現在ではこの三つの宝は、三種の神器といわれて天皇の位を象徴するものであり、これなくして天皇とは認められない。現代でも劔璽等承継^{けんじとうしょうけい}の儀として、皇位継承に際し三種の神器を引き継ぐ儀式が行われている。

古来、日本という国を統治してきた天皇家にとって、これほどまでに重要な三種の神器の一つである草薙劔に関しては、その神聖性から次のような神話が作り出された。

草薙劔が日本神話のなかで登場するのは、有名な大蛇退治神話においてである。英雄神スサノヲが邪神であるヤマタノヲロチという大蛇を退治し、その尾から神聖なる劔を獲得するという話である。スサノヲはこの劔があまりに神々しいので自分のものとはせず、天上界の最高神アマテラスに献上する⁸。

次に草薙劔が神話の中で登場するのがこれも有名な天孫降臨^{てんそんこうりん}神話においてである。これは天皇家の祖先が、神々の世界の支配者である天照大神^{アマテラスオオミカミ}の子孫として、天上界から下界に降りてきたという神話である。その際に、人間界である下界を統治するという任務の象徴として授かったのが、劔と鏡と勾玉の三つの宝であった。これが現在の三種の神器であ

⁵ 実際には 4 世紀頃かと考えられる。

⁶ 劔靈劔は、現在、石上神宮に祭神として祀られている。神話上、劔靈劔がタケミカヅチの手に戻ることなく石上神宮に祀られていることから、タケミカヅチを祀る鹿島神宮では二代目の劔靈劔と解されている神劔を大切に保存している。『常陸国風土記』に佐備大麻呂^{さびのおおまろ}らが慶雲元年（704）に鹿島神宮の神山の砂鉄で劔を造ったことが記されているが、これがこの神劔ともいわれている。これは 2.7 メートルを超える長大な「直刀」で、国宝にも指定されている（昭和 30 年指定）。

⁷ 三種の神器とは、古来皇室に伝わる八咫鏡^{やたのかがみ}・草薙劔（天叢雲劔^{あめのむらくものつるぎ}）・八咫瓊勾玉^{やさかにのまがたま}の三つの宝のことをいう。

⁸ ヤマタノヲロチ神話は、英雄が怪物を退治して犠牲になろうとしている乙女を救うというものであるが、同様のストーリーの型を持つ神話は世界中にあるといわれ、従来神話学ではこれをペルセウス・アンドロメダ型として解釈する場合が多い。英雄ペルセウスが海の怪物を退治してエチオピアの王の娘であるアンドロメダを助けるというギリシア神話に由来している。

るという⁹。

元来、呪術の道具であった草薙剣は、神話の中で以上のように描写されている。

にぬりや 丹塗矢

古代神話に登場する武器として、丹塗矢をあげておこななくてはならないだろう。赤く塗った矢のことである。

丹塗矢については同様の神話がいくつか伝えられているが、おおよそ次のようなストーリーである。神の化身である丹塗矢が川を流れてやってきて、シャーマンの女性に接触して神の子を生ませる、といったものである¹⁰。

古代日本において、水は何物かを生み出す呪力があるものと考えられていた。川を流れてやってきた矢は、水の呪力とともに神の子を生んだということである。また、赤く塗った矢が災厄を払いのける力をもつとする信仰もあった¹¹。こういった信仰を背景に、丹塗矢が出産にともなう災厄を排除して神の子を生むという神話が生まれたと考えられる。

中世の武

武士の出現と武術

武術を身につけ軍事にたずさわる人を武士というが、およそ平安時代後期にこういった人たちの集団が登場し江戸時代まで一つの社会的な階層を形成していた。

徳川^{とくがわいえやす}家康が徳川幕府を開くまでの日本の中世といわれる時代は、武士集団同士が戦いを繰り返した戦国乱世であった。有名な戦いに源氏と平家の合戦などがある¹²。

当時の武術は総合武術であった。後にみるように単一の武術だけを修練するということではなく、武士は様々な武術を身につけていなくてはならなかった。中世の戦いは、当初、騎馬戦が主であり、お互いに馬に乗って弓を射て、槍で突き、刀で斬り結んで、組み伏し、敵の首を取る、といったものであった。身につける武術の種類に制限をつけず、敵を倒す

⁹ 天孫降臨神話における三種の神器について、わかりやすく語られているものとして、『日本書紀』（第九段一書第一）に以下の様な記述がある。

故、天照大神、乃ち天津彦彦火瓊瓊杵尊に八坂瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙剣、三種の宝物を賜ふ。

この神話的イメージを拠り所として、三種の神器を代々皇統を継ぐ者が受け継いできている。

¹⁰ 『古事記』神武紀皇后選定の件に、オホモノヌシ神が丹塗矢に身を変えて川を流れてセヤダタラヒメという美しい乙女に接触し妻として子を産ませたという伝説がある。また、『山城国風土記』逸文に、玉依日売が火雷神の化身である丹塗矢が川上から流れてきたのでこれを持ち帰り床の辺に置いておいたところ、懐妊して男の子を生んだという一説がある。

¹¹ 矢にはそもそも辟邪の呪術性があるが、丹塗矢は、丹塗の赤色が血液の呪的能力を意味し、元来の矢そのものの呪術性とあいまって更に強力な呪具となっていたと考えられる。

¹² 一般的に日本史では、鎌倉幕府成立後を中世とするが、本稿では武道文化史の立場から便宜上、平安時代末期の源氏と平家の合戦あたりも含めて述べていくこととする。

ためのあらゆる技術を習得したのが中世の武士であった。

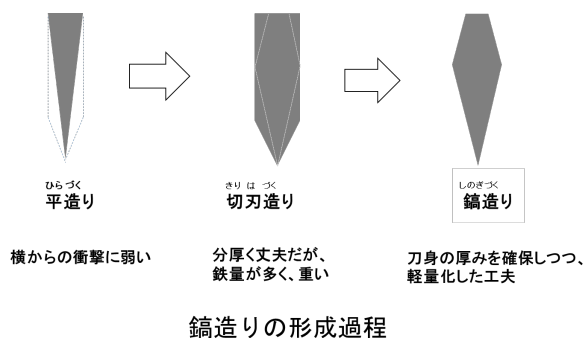
日本刀の出現

日本武道史の中でこの時期、特に注目すべきこととして、日本刀の完成があげられる。

日本列島に金属文明が伝わってきたのは紀元前3世紀末、弥生時代初期のことであるとされている。先にも述べたが、武器としては片刃の刀が主に使われてきた。この中国伝来の刀は、刀身がまっ直の^{ちよくとう}直刀といわれるものである。これに日本独自の変化がみられるようになる。

一つには、「^そ反り」といわれるカーブを描いたような形になる。なぜこういった形になったかという、まっ直であれば敵を斬った時に折れやすい。これにカーブをつけて少し力を逃がしてやることにより、折れず曲がらずよく斬れる工夫をしたのである。この変化には、日本列島の東北地方に勢力をもっていた^{えみし}蝦夷といわれる人たちが使っていた^{わらびてとう}蕨手刀が影響を与えたともいわれている。蕨手刀とは、刀身はまっ直であるが、この刃部と手持つ柄とのジョイントの部分がくの字に折れたような形の刀である。

二つ目は、刀身の両サイドが膨らんだ形の^{しのぎづく}鎗造りといわれる形状に変わったことがあげられる。通常の刃物の断面は三角形であり、これを^{ひらづく}平造りというが、この形では横からの衝撃に弱く折れてしまう可能性がある。そこで刀身を分厚くして、刃が急に切り込むような形に変えた。これを^{きりはづく}切刃造りという。この形状であれば横からの衝撃にも強く折れにくい。しかし、刀身全体の鉄量が多く重たい。そこで更に工夫をし、断面を菱形のような形状にし、横に張り出した^{しのぎづく}鎗と呼ばれる部分で刀身の厚みを確保しつつ、棟の幅を狭くし、刃を鋭角にして軽量化した。この形状を「鎗造り」という。



通常、日本刀の特徴としては、上記の反りと鎗造りがあげられるが、ここでもう一つ「研ぎ」に注目しておきたい。日本刀は、一点の曇りもなくまるで鏡のように綺麗に研ぎあげられる。武器の機能としては、ここまでの研ぎは必要ない。しかし日本人は、この研ぎ澄まされた日本刀の刀身に自らの心を映し込み、時にはそこに神さえ見ていた。こういったメンタリティーは日本に特有のものであり、ここでは日本刀の三つ目の特徴としてあげておきたい。

この三つの特徴を備えた刀を、それまでの中国伝来の刀と区別して日本刀といっている。

それまでの中国伝来の直刀の技術は、斬るというよりは突くとか叩き殺すといった類のものが主であったと予想されるが、日本刀の出現により斬る技術が発展したものと考えられている。

日本刀が完成したのは平安時代中期ごろといわれており、この時点で日本刀は素晴らしい武器としての機能を完備していたが、これが日本武道の中で華々しく活躍するのはまだまだ先のことで、この時代、武器としては二次的なものであったことも確かである¹³。

¹³ 中世期、合戦で日本刀が活躍する余地があまりなかったことを指摘する学説がある。で

中世の武を主導した弓

中世の武士はあらゆる技術を身につけていたが、彼らが当初メインにしていた武術は弓である。中世武士のことを「弓矢とる身」といった¹⁴。

彼らは弓の技術がいかに優れていたかで周囲の人々から評価された。

弓の名人として有名な武士に、那須与一^{なすのよいち}という人がいた。源氏と平家が戦いを繰り広げていた頃、源氏側で戦った武士である。屋島^{やしま}の合戦の時、海上の小舟にのった平家の女性が竿の先に扇をつけてかざし、これが射れるかと挑発をする。那須与一は馬に乗って海中にはいり遙か遠方から見事にこの扇の的を射落とした。与一の見事な弓の技量に、源氏のみならず敵の平家の軍からも歓声が上がったという。

騎射の訓練

当時の戦いは騎馬戦であり、現在の弓道のように人が立った状態で弓を引くのではなく、馬を操作しながら弓を射る特殊な技術が必要であった。そのため当時の武士は独特な騎射の訓練を行なった。これを「騎射^{きしや}の三物^{みつもの}」という。まさしく騎射の三つの訓練である。

先ず一つ目は「流鏑馬^{やぶさめ}」といわれるものである。

当時の合戦では、有名な武士同士が一对一で勝負をする一騎打ちというものがあった。大勢が入り混じる合戦のなか、大声で自分の生い立ちや戦歴を叫び、自分と戦うにふさわしい相手を探す。弱い相手に勝っても価値がないのである。戦うに値する相手が見つかった場合、両軍全員が戦いをやめて見守る中、向こうとこちらから馬をすれ違いに走らせながら弓を射合せて戦う¹⁵。

はどういった場面で日本刀が使用されたのかというと「首取り」である。戦場で倒した敵の首を取ってることが自らの手柄を証明するものであり功名につながった。(鈴木真哉『刀と首取り』平凡社、2009、参照)

¹⁴ 武人としての名を重んじる源義経の弓に対する思いがよく表れているものとして、『平家物語』『弓流』の件がある。源義経(判官)は馬で海中に乗り入れ戦ううちに、敵に弓を引き落されてしまう。義経は鞭でかき寄せてこの弓を取り戻してきたが、老武者たちはこの義経の危険を顧みない行為を非難した。しかし、義経は「弓が惜しくて取ったのではない。強い弓であれば敵に取らせたであろうが、弱々しい弓を敵が手にして『これが源氏の大將である義経の弓だ』と嘲るであろうことが残念で命がけで取ったのだ」と言い、人々は義経の思いに感じ入った。以上のような内容である。

¹⁵ 一騎打ちの話としてよく取り沙汰されるのが、川中島の戦いにおいて、上杉謙信が武田信玄に打ちかかった話などがあるが、ここでは中世武士の精神性をよく表しているものとして『今昔物語』(巻第25第3話)に記される源充^{みなもとのみつる}と平良文^{たいらのよしふみ}の一騎打ちを以下に取り上げておく。今は昔、東国に源充と平良文という武人がいて互いに武勇を競っていたが次第に仲が悪くなっていき、ついに日を決めて野で軍勢を率いて決戦をすることになった。こういった戦いの習わしとして、双方から兵が出て牒(開戦状)を取り交わし、その兵が自陣に引き返してきた時に、矢を射はじめて開戦となる。その際、その兵は馬をあおらず、後を振り返らず、静かに帰ってくるのが勇猛と評された。この戦いがまさに開始されようとする時、良文から、軍勢同士の戦いは中止して、大將同士二人だけで馳せ合って腕前の優劣を確かめようという提案をした。充もこれに承諾して、味方に手を出さずに静観するように指示した上で、一騎打ちとなった。双方、何度か馳せ違いつつ射合わせ、見事な技を駆使して戦った末に、二人の技量がわかったのもういいだろうということになり、双

遠くからお互いに馬を走らせてすれ違うまでに、素早く何本もの弓を射る必要があり、その技術を習得するための訓練が流鏑馬である。まっすぐの馬場の三ヶ所に的を立てて、馬を走らせながらその的を射るという訓練である。素早く矢をつがえて弓を射るための練習である。「矢継ぎ早」という言葉は、これに由来する。

二つ目は「犬追物^{いぬおうもの}」といわれるものである。

馬に乗って弓を使うにはいくつかの制限がある。その最大のものは、自分の左側の敵しか弓で射ることが出来ないということである。日本の弓は 2 メートル以上もあり非常に長い。これを左手に持って右手で引き絞る矢を射る。つまり左手で持った長弓は、常に馬体の左側にあるということである。馬にまたがった状態でこの長い弓を馬の首を越して右側に持ってくることは非常に困難であり、またそうできたとしてもその状態から右手で矢を十分に引くことは到底できない。従って自分の左側の敵しか攻撃することはできず、敵が自分の左にくるように馬を操作することが重要となる。この対象物を左にくるように馬を操作して弓を射る訓練が犬追物である。円形の馬場の中央から犬を放し、これを馬を操作しながら追いかけて射る。矢は刺さらないように工夫がされており、当たっても犬が死ぬことはなく、つづけて練習をすることができる。素早く動く犬を常に左にくるように馬を操作する練習である。

騎射の三物の三つ目は、笠懸^{かさがけ}である。

これは遠くに懸けてある笠を的にして、馬の上から射る練習である。馬上からの遠矢の訓練である。

槍の台頭

中世後期になると、鎧が歴史の表舞台に躍り出てくる。

槍の発生については平安時代にまで遡る可能性を指摘するもの、あるいは成立を鎌倉時代末期頃とするもの等諸説あるが、いずれにしても室町時代に入って盛んに使用され、安土桃山時代には武家を象徴する武器として華々しく活躍した。

顕著な例としては賤ヶ岳の七本槍の伝説¹⁶などが有名である。

江戸時代になると百石百俵以上の武士は槍を持つことが規定される。武士のことを「槍一筋の家」などと称した。

鉄砲を捨てた日本人

1543 年に、種子島に漂流したポルトガル人によって鉄砲が日本に初めて伝えられた。これによって日本の戦国時代の戦いは大きく変わる。

武士がその技術を競い合った弓矢は、同じ飛び道具である鉄砲にその役を奪われることになる。日本人は元来器用であり、伝わってきた鉄砲に工夫改良を加えて随分優秀な鉄砲を作り、輸出までしていたようである。1575 年に織田信長^{おだのぶなが}と徳川家康^{とくがわいえやす}の連合軍が多く

方軍勢を引いた。以後、二人仲良く過ごしたということである。以上、単なる敵を倒すための戦いでない、中世武士の生き様が如実に表れた典型的な一騎打ちの件である。

¹⁶ 1583 年、豊臣秀吉が柴田勝家と賤ヶ岳で戦った際、特に功績のあった七名の家臣を称して、後世「賤ヶ岳の七本槍」といって讃えた。具体的には福島正則^{ふくしままさのり}・加藤清正^{かとうきよまさ}・片桐且元^{かたぎりかつもと}・脇坂安治^{わきさなかやすはる}・加藤嘉明^{かとうよしあき}・平野長泰^{ひらのながやす}・糟屋武則^{かすやたけのり}の七人である。

の鉄砲を駆使して、伝統的な騎馬戦を得意とする ^{たけだかつより}武田勝頼 の軍を撃破した ^{ながしの}長篠 の戦は有名である。

しかし日本人はこの鉄砲を放棄することになる。新たに登場した鉄砲を武術のメインにおくことをせず、武士は後に刀剣にその精神的拠りどころを求めるようになる。

当時の日本人が鉄砲を放棄したことについて Noel Perrin という人が *Giving Up the Gun* という本を書いている¹⁷。その中で彼は重要なことを指摘している。本来、武士はいかに武術を鍛錬してきたかということを合戦の中で競い合った。鍛錬しつくされ弓の技術に長けた武将は、英雄だった。それに対して鉄砲をつかったのは、多くは雑用に従事する ^{あしがる}足軽 と呼ばれる下級武士であった。鍛え抜かれた武将が一介の下級武士が放った一発の弾丸で命をおとすことを日本の武士は嫌ったというのである。

戦は単なる殺し合いではなく、鍛錬により身につけた武術を駆使して死を恐れず正々堂々と戦うというものであった。だからこそ全員静止の中で行なわれた一騎打ちが最高の名誉でもあった。武士には戦いの中に美学があったということである。これが武士道といわれるものの原点でもある。

武士道

中世の武士には戦いの中で守るべき行動規範というものがあつた。人が法律によって守られることのない戦国乱世においても、彼らが守らなくてはならない暗黙の了解が厳然として存在していた。それを後に「武士道」という。しかしこの時代にはまだ「武士道」の語はなく、中世前期に武士の表看板であつた弓をもって「弓矢とる身の習」であるとか「弓矢の道」であるとか言った。

戦場における武士は、卑怯を嫌い正々堂々と戦うこと、臆病を戒め死を恐れずに戦うことを追求した。正々堂々と死を恐れず戦うことは「武勇」といって彼らにとって最高の名誉であり、彼らはこの「名誉」のために戦った。逆に戦場における卑怯や臆病は「恥」であるとしてこれを最も嫌った。

また後世、武士道として戦場において自分の主君にたいする潔い献身をいう場合がある。主君の馬の前で盾になって潔く死ぬのが武士のあるべき姿であるという考え方である。しかし一方で、中世の武士は自分の主君が不甲斐ないものであると感じたらあっさり別の主君に仕えることもあつた。主人を七度も変えた有名な武将もいるし¹⁸、また ^{とよとみひでよし}豊臣 秀吉 などは他の主君に仕えたいと申し出た家臣を快く許したという逸話もある。また下克上といって下位の武士が上位の者を倒してのし上がるようなこともよくあつた。

この時代は、後の江戸時代のような社会秩序が確立した平和な時代とは異なり、絶対的な上下関係は確立していなかった。従って、中世武士道の特徴は、主君への献身もさることながら、先に述べたように個々人が戦場において「恥」を嫌い「名誉」のために「武勇」を重んじて戦うことに特徴があると考えてよいだろう。

修 行

中世後期には、戦場での実戦経験を豊富にもった天才的な武術家が多く登場した。彼ら

¹⁷ ノエル・ペリン著 川勝平太訳『鉄砲を捨てた日本人』中央公論社 2004

¹⁸ 藤堂高虎は、主家を転々と変えた武将として有名である。

は戦いに備え、人より優れた技術を身につけるためにいかなる鍛錬をしたのか以下に見ていきたい。

・塚原卜伝つかはらぼくでんの修行

塚原卜伝は、延徳元年（1489）に生まれ、没年元亀2年（1571）と伝えられる。37度もの戦場を経験し、生涯212人もの敵を討ち取ったとされる日本武術史上最強ではないかといわれる天才である。彼は幼少の頃から武術に長けていたが本当の極意を得ようとして、鹿島神宮に一千日ものあいだ籠もって修行する。そして最後に夢の中で極意を悟ったといわれている。最終的には神様から極意を授かったというものであるが、神道の社に籠もりきっての苦しい修行が前提となっている。

・愛洲移香あいすいこうの修行

愛洲移香は伊勢の愛洲（現在の三重県志摩）の人であり、享徳元年（1452）に生まれ天文7年（1538）に亡くなっている。若い頃から剣の技術に長けていて大いに暴れまわり、遠くは海を渡って中国大陆の明国にまで渡航したことがあるとも伝えられている。相当の実力を持っていたはずであるが、あらためて36歳の時に宮崎の鶴戸神宮に籠もりきって剣の修行をした。その結果、満願の日に、夢の中に神が猿の姿で現れ極意を授けたともいわれている。

・上泉伊勢守かみいずみいせのかみの修行

上泉伊勢守は永正5年（1508）に生まれ、天正10年（1582）に没している。上泉の名声を聞いて武田信玄が召抱えようとしたが上泉は辞退し、神後伊豆守じんごいずのかみ、疋田豊五郎ひきたぶんごろうらの高弟を従えて武者修行にでた。その後、下鴨神社（京都）に参籠し、霊夢により、義経が鞍馬の僧から学んだ技を記した伝書を得て、新陰流を創始した。

・飯篠長威斎いひざさちよういさいの修行

飯篠長威斎は応永年間に生まれたといわれ、没年は長享2年（1488）である。もともと下総国香取しもとうき（現在の千葉県）の人であるが、若い頃には京にでて将軍であった足利義政あしかがよしまさに仕えたといわれるほどの剣の腕前であったという。しかし帰郷して一千日もの間、香取神宮に籠もって神に祈願しながら剣の苦行をし、満願の日に夢の中で極意を得たという伝説がある。

以上4名の修行は、いずれも当初から剣の技術が人並外れて優れていたが人生のある時期に行き詰まりを感じ神社などの神と接触が可能な特殊な場での一千日にもおよぶ荒行の末に霊夢により極意を悟るといった一定の型をもっており、参籠開眼といわれるものである。神道の影響を多分にうけた修行であり、根底には神から授かる「神授の思想」がうかがわれる。

・斎藤伝鬼房さいとうでんきぼうと修験道の修行

中世になると日本全体に仏教が浸透しはじめる。しかし日本の場合、それまでの日本に自然発生的に起こった信仰である神道と、外来の新たな勢力である仏教が争うということではなく、お互いにうまく融合して行く。代表的なのは、山岳神道と仏教の特に密教が融合した修験道である。この修験道の修行が武術に大いに影響を与える。山の中で修行する修験道の行者から、刀や槍の技術を学んだ斎藤伝鬼房（1550～1589）などがある。

流派の成立

中世の終わりに多くの実戦を経験した剣の達人が出現し、それ以後の剣の隆盛の基礎を

つくっていった。彼らのことを剣豪という。先に紹介した塚原ト伝や愛洲移香、上泉伊勢守、飯篠長威斎、斉藤伝鬼房等もそのうちの一人である。

剣豪として名を馳せたような天才的人物が登場すると、その技術を教わろうとして必然的にそのまわりに人が集まる。

武術には一つの大きな特徴がある。それは徹底した秘密主義をしいていたということである。自分の獲得した極意をめったには教えない。なぜなら戦国乱世にあって自らの名声が高まるのは、他にはない高度な技術をもっているからであり、これが他に流れて広まってしまうえばその人の特徴はなくなってしまう。また自分が教えた技術で逆に殺されてしまうかもしれない。そういったシビアな世界でもあった。

しかし世情が落ち着いてくれば状況は少しずつかわってきて、弟子をとり教える者がでくる。そうすると師と弟子からなる特殊な集団が形成される。これが流派である。

流派の成立には以下の三つの条件がある。

- ・ 天才的人物の出現
- ・ 技法が非常に高度であること
- ・ 技法の体系と教習課程が整備されていること

最後の技法の大系と教習課程が整備されているかどうかということが、その流派がその後いかに栄えていくかにかかわってくる。流祖といわれる天才的人物がいかに高度な技術をもっていたても、これがなくては流派の存続は難しい。

武術の中で最も早くに流派が成立したのは弓であり、14 世紀初め頃といわれている。剣術や柔術・槍術などの流派は 15 世紀後半にその源流を求めることができるが、流派として確立していくのは 16 世紀半ば以降である。

近世の武

剣が主導した近世の武

徳川家康は戦国乱世を勝ち抜き、天下統一を果たして 1603 年に徳川幕府を開いた。それ以降は、基本的には戦いのない平和な時代が 1868 年の明治維新まで続くことになる¹⁹。日本史のなかでは近世にあたり江戸時代という。

それまで武士は実戦のためにあらゆる武術を身につけこれを総合的に駆使してきた。しかし江戸時代にはいり平和な時代がすすむと、武士は徐々に単一の武術を重点的に修練するようになる。私は剣が専門ですよとか、槍が専門ですよ、といったことが許される時代である。

近世の武術は「武芸十八般」などといって多くの種目が存在していた。主なものをあげると、弓術、馬術、槍術、剣術、水泳術、抜刀術、短刀術、十手術、銃術^{しゅうけん}、含針術^{なぎなた}、薙刀術、砲術、捕手術^{とって}、柔術、棒術、鎖鎌術^{くさりがま}、鋌術^{もじり}、忍術^{しのび}などである。

しかしこれら様々ある武術種目のなかで、近世の武を主導したのは剣術である。

武士は武士階級の象徴として常に大小二本の刀を携行し、またこの刀は単なる護身のた

¹⁹ 近世初期には、大阪の役(大阪冬の陣 1614 年、大阪夏の陣 1615 年)、島原の乱(1637-1638)などの戦もあった。

めの武器ではなく彼らの精神的な支柱でもあった。明治にはいり、江戸時代のことを振り返って、新渡戸稲造は「刀は武士の魂」(The Swords, the Soul of the Samurai)であると述べている。

ではなぜ剣に武士の意識が向いたのかということ、これについて先に紹介した Noel Perrin がその著の中で穿った見解を述べている。つまり「刀剣が日本ではヨーロッパよりはるかに大きな象徴性をもっていた」ということである。剣は、古来神の象徴として神社に祀られてきたし、三種の神器のように天皇の位の象徴としても機能してきた。このことが近世に至って剣が武の主役を演じるようになった一因であるということである。更に私見を付け加えると、この剣の象徴性は、先に見た師霊剣や草薙剣などの霊剣伝説にみられるような神話的イメージに根拠づけられていることに注意すべきである。

剣術流派の三大系統

先にも述べたように武芸の流派は徹底した秘密主義をしいており、師から教わったことは親兄弟といえども他言してはならなかったが、他の芸道とは異なり、教習課程の最終段階つまり免許皆伝の印可を与えられた者は弟子を取って自流を立てることができた。つまり新しい分派が生まれるということである。複数の優秀な弟子が育てば複数に分派する。近世の武を主導した剣術の流派は、時代とともに分派を重ね、江戸時代には 600 とも 700 ともいわれる多くの流派があったといわれている。それらの流派の源流をたどっていくと、大きく三つの系統があったといわれている。

それぞれの系統の源流は、先にみた中世後期の剣豪である 愛洲移香、飯篠長威斎や 中条兵庫頭が創始した流派である。

まず一つ目は、愛洲移香が創始した陰流を源流とする系統である。この陰流を学んだ上泉伊勢守が創始したのが新しい陰流という意味をもつ新陰流である。そして上泉に試合を申し込み敗れて弟子になった 柳生宗厳は、柳生家において新陰流を継承する。一般には柳生新陰流あるいは新陰柳生流ともいわれているが、正式な名称は単に新陰流である。柳生宗厳の五男である柳生 宗矩が江戸においてこの流派を引き継ぐことになる。父である宗厳は、文禄 3 年(1594)に徳川家康の要請によって剣の技を披露した。徳川家康とは、後に天下統一を果たし慶長 8 年(1603)に江戸幕府を開いた、日本史上大変に重要な人物である。この時、家康は自ら木刀をもって立ち合ったと伝えられている。ここで新陰流の極意である無刀取りの技に感服した家康はその場で宗厳に入門を申し入れる。宗厳は高齢を理由にこの申し入れを断るが、これが縁で息子である宗矩は徳川幕府成立後に將軍の剣術師範として活躍することになる。宗矩は幕府の要職につき、大名にまで登りつめた。最も出世した剣術家といってよい。愛洲移香の陰流、上泉伊勢守の新陰流、柳生宗厳・宗矩親子の柳生新陰流と流れる剣術流派の系統は、政治色を帯びつつ発展した最もメジャーな系統の一つである。

二つ目は飯篠長威斎が創始した天神正伝香取神道流(神道流)を源流とするものである。神道流は香取神宮とゆかりの深い流派である。これとは別に古来、鹿島神宮を中心として発展してきた鹿島の太刀と称する流派がある。鹿島神宮の神官たちが習い伝えてきたものであり、同一系統のものを時代とともに 鹿島上古流、鹿島中古流と称してきた。先にも述べた塚原ト伝という人物は、そもそも鹿島神宮の神官であった吉川家に生まれ、鹿島に伝わる剣を習い育つ。彼は次男であったために塚原家に養子に行く。この養子に行っ

た先の養父からは神道流を習う。こういった事情から、塚原ト伝は剣術三大源流の一つである神道流に鹿島に伝わる剣術を融合させて新たな流派を作った。これを新当流という。飯篠長威斎の神道流から、塚原ト伝の新当流に流れる系統は、非常に神道的な宗教色を帯びつつ発生展開したものであり、これが三大剣術系統の二つ目である。

三つ目の系統は、中条 兵庫 頭 長秀が創始した中条流を源流とするものである。中条兵庫頭については、日本武道史上非常に重要な人物であるにもかかわらずその素性があまりにもわからない。応仁の乱（応仁元(1467)～文明 9(1477)年）の頃の人ということが伝えられているだけで生没年さえ不明である。中条家はもともと 相州（現在の神奈川県）鎌倉の豪族で、中条流平法という剣術を行っていたが、長秀はこの家伝の剣術を習得すると同時に、慈 音 という僧について剣を学んだと伝えられている。この系統を受け継ぐのが伊藤 一刀 斎 が創始した一刀流である。一刀斎の弟子には 神 子 上 典 膳 忠明などがいた。典膳は後に小野次郎右衛門忠明と名乗って一刀流を継ぐ。小野派一刀流として新陰流同様に幕府の剣術指南役となる。柳生宗矩のように幕府の要職に就いて出世するという事はなかったが、江戸時代を通じてこの一刀流系統は最も栄えた流派であるといつてよい。中条兵庫頭の中条流から伊藤一刀斎の一刀流、そして小野派一刀流へと流れる系統は、近世剣術三大系統の一つであるばかりでなく、現代剣道の技術に最も影響を与えたといつてよい。

武の芸道化 — かた（形・型）²⁰

武術の技術を伝えていく方法として、日本では非常に興味深い方法をとるようになる。

武術というのは本来人を殺傷することを目的とする。しかしこの技術を練習するというになるとそれなりの工夫が必要となってくる。剣の技術を練習するたびに相手を斬ったり、逆に相手に斬られたりしていたのでは命がいくつあっても足りない。殺傷性を排除した練習方法が必要であるということである。

そこでどういった工夫をしたのかというと、中世において既にお茶や華道、能楽といった芸道といわれる分野において定着していた「形」による稽古方法を取り入れたのである。決められた形を真似して行う、約束事の稽古である。これを武術に取り入れて、敵がこうやって斬ってきたのに対して自分はこうやって対応するというような約束事での稽古を繰り返すのである。このように芸道の稽古方法を武術に導入したことを、武の芸道化といっており、これより武術のことを武芸というようになる。

「形」による稽古には西洋のトレーニングとは違った特徴がある。最初の段階では、決められた形を寸分たがわぬように真似させることから始める。各自の工夫は許されない。非常に拘束力が強く大変に窮屈である。流祖がつくった技の形を身体に擦り込ませるというイメージである。そうすることによって技の形の中に潜んでいる技の真髄（型）が自然に習得されていく。そのことによって次の段階になって形を自分なりに活用し、そしてもとの形を離れて自由に動いたとしても、流派の特徴を失うことなく動くことができる。何

²⁰ 「型」は、鋳型や型木の意で、「本質」や「真髄」といった目に見えないものを指すときに用いられる語である。それに対して「形」は、実際に表現される目に見える具体的な「かたち」を指す語である。宮本武蔵は死んでも、武蔵の剣の本質・真髄は「型」として伝えられ、それを後世の弟子が技として表現したものが「形」である。「型」はそれを行う人によって左右されないが、「型」を表現した「形」はそれを行う人によって例えば上手い下手といったように左右される。

故なら最初の段階で流派の真髓が身体に擦り込まれているからである。こういった考え方を。簡単なものから徐々に工夫を加えながら高度な技術に高めていくというような西洋的、現代的な考え方ではない。いきなり流祖が作り上げた難しい技を形として徹底してやらせた後に、徐々に自由にしていこうという方向である。この順序を「守破離」といっている。この「守破離」という言葉は茶道でつかわれる用語である²¹。

剣 豪 宮本武蔵

日本で最も有名な剣豪といえば、近世初期に活躍した宮本武蔵である。塚原ト伝とならぶ日本武道の二大剣豪の一人といってよい。通常日本の剣術は両手で一本の刀を使うが、武蔵は二本の刀をそれぞれ片手でもって戦った。二刀流といわれるものでこれが彼の独自のスタイルである。

宮本武蔵は世界的に有名であるが、その名声とは裏腹に実に謎の多い剣豪でもある。

武蔵は一般に『五輪書』を書いた人として知られているが、実はこの『五輪書』には原本が存在しない。今伝わっているのは全て写本である。そのことから『五輪書』は武蔵が書いたのではないのではないかということさえいわれている。このことについては学会で様々議論されてきたが、総合的に判断すると『五輪書』は完成したものではないが、武蔵が草稿として書き残し弟子に与えたものであろうと考えられる。根拠はいくつかあるが、まずは文章が粗削りであり整えられていないということがあげられる。例えば、地・水・火・風・空と五巻あるが、自らの流派名を地の巻と水の巻では「二天一流」と書いているが、その後の火・風・空の巻では「二刀一流」としている。「円明流」から「二天一流」と流名を変える時期であったと考えられるが、自らの流派名すら統一できていない。恐らく「二刀一流」として一回書き通したものを、再度最初から推敲しつつ「二天一流」として書き直し、水の巻で終わっているということである。つまり未完成であると考えてよい。例えば弟子が師である武蔵の名を語ってこの書を記したとすると、こういったことはまずはおこらないはずである。草稿段階ではあるが、武蔵による書であると考えるのが妥当である。

武蔵は天正^{てんしょう}12年(1584)に生まれたとされているが、その出生地も播磨^{はりま}(現在の兵庫県)とする説と美作^{みまさか}(現在の岡山県)とする説があり、はっきりしない。

若干13歳の時に初めて真剣勝負をし、有馬喜兵衛という兵法家に勝ったとされている。17歳で、その後の歴史を江戸時代へと大きく変えて行くこととなる関ヶ原の合戦を経験する。21歳で京にのぼり他流試合を繰り返す。剣術の名門である吉岡一門と戦い勝利するが、恨みをかい遺恨試合となる。29歳で有名な佐々木小次郎との巖流島での戦いに勝つ。13歳からここまで60数度の試合をしてきたが一度も負けたことはなかった。

しかし、武蔵はその後ぱったりと他流試合をやめてしまう。自分の強さが本当のものでなかったことに気付き、本格的な修行にはいったともいわれている。兵法の真髓を会得したのは50歳のときであるという²²。しかしその20年間、彼がどういった修行をしてい

²¹ 江戸千家の流祖である川上白(1719-1807)が著した『白筆記』に「守破離」のことが書かれている。

²² 『五輪書』地之巻

我、三十を超へて跡をおもひみるに、兵法至極してかつにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理をはなれざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。其後なをもふかき道

たのか、どういった生活をしていたのか全く謎である。

武蔵の生涯はその剣の実力とは裏腹にあまり恵まれていたとはいえない。当時の兵法家は自分の実力を認めてもらい、名のある武将や大名に召抱えてもらうことを望んでいた。そのために自分の名をあげようと他流試合をして諸国を廻った。しかし武蔵は日本中でその剣の実力が有名であったにもかかわらず、当初彼を召抱えるものはなかった。ようやく晩年、肥後熊本藩の藩主である細川忠利に召抱えられたのが 57 歳の時である。

武蔵は細川忠利に大変感謝していたという。その気持から、細川忠利に自分の剣術の要諦を書き記したものを献上したのが『兵法三十五箇条』である。しかしその後すぐに細川忠利は亡くなってしまう。武蔵の落胆は尋常でなかったという。

60 歳で『五輪書』を書いたといわれるが、その真偽は定かでない。

62 歳で最後の力を振り絞って『独行道』をしたため亡くなった。「我事において後悔をせず」という有名な一文は、この『独行道』の一節である。

『五輪書』と『兵法家伝書』の心法論

近世初期には、それまでの実戦における経験が理論化されてくる。

戦国乱世においては、多くの名人達人がいたが、明日自分の身がどうなっているかもわからないような毎日で、自らの身をまもるために戦うことが精いっぱいであったはずである。それが江戸時代という基本的には平和な時代となり、実戦での経験を振り返って理論化する余裕が出来てくる。この近世初期というのは非常に特殊な時代である。乱世を生き抜いた本当の実戦を知る人間が、その貴重な体験を理論化することができたごく限られた時代でもある。これより後になると平和な中で育った実戦を知らない武芸者の理論になってしまう。この貴重な時期に、その理論を集大成した武芸伝書が書き著された。

近世初期における二大武芸伝書として『五輪書』と『兵法家伝書』をあげることができる。

『五輪書』は、正保 2 年(1645)に宮本武蔵が著したことになっている。先にも述べたように、この伝書を宮本武蔵自身が書いたのかどうかは定かでない。しかしその成立の経緯は別として、その中に描かれているものが武蔵の理論そのものであることは間違いない。非常に荒削りであるが、実戦的技法や戦術が迫力ある文章で書かれている。

『兵法家伝書』は、寛永 9 年(1632)に柳生宗矩が著したものであり、将軍家剣術師範として恥ずかしくない洗練された理論が、非常に綺麗な文章で書かれている。三代将軍である家光、禅僧である沢庵たくあんとの親交の中で構築された理論を、禅の用語などを多く使って書いている。心の問題を重要な課題としてとりあげ、理想的な心へ高める工夫について述べているところに大きな特徴がある。

『五輪書』と『兵法家伝書』は対照的である。

例えば『兵法家伝書』では、剣術が仏教と通ずるものがあることを明記して禅の用語を多く引用している。禅は仏教の一宗派である。それに対して『五輪書』では冒頭で、この書を著すのに仏教などの語を使わないと明言している。

また例えば剣術の構えについて、『五輪書』では構えは敵を斬るためのものであるとして

理を得んと、朝鍛夕練してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。

いるのに対して、『兵法家伝書』では構えは敵に斬られないためであると記している。根本的な考え方が正反対である。成立は『兵法家伝書』が先であり、武蔵が『五輪書』の中でわざと反対のことを書いているようにも見える²³。

しかし両書が共通して強調している事柄がある。それは敵と対したときの心の問題である。両方とも剣術における心を平常の心と同じにすることを説く。また心が何かにとらわれることを嫌い心を止めないことも強調する。これを心法論という。心法とは、今ある心の状態を理想的な境地に高める工夫のことをいい、その理論を心法論という。

『五輪書』は文章表現が大雑把なため理解しがたいが、『兵法家伝書』では緻密な理論構築をしている。理想的な心を「平常心^{びようじょうしん}」や「常の心」「無心」とし、その反対の心の状態として「病」という概念を設定し説明している。また、心をいくつかの種類にわけて要になる心を腹におきその他の自由な心を自在に使うというのである²⁴。従って要になる心が置かれている腹が大切である。日本の武道では腹を鍛える。日本の身体感覚では腹の張った三角形の体型が理想である。西洋で肩の張った逆三角形の体型を理想とするのとは正反対である。

また、『五輪書』『兵法家伝書』ともに心と身体の関係について論じている。『五輪書』では、身体が静かな時は心を動かし、身体が動いている時は心を静かに保てと述べている。『兵法家伝書』では、心が待っている時は身体を懸からせ、心が懸かっている時には身体は待たせておけと述べる。両書とも同様に、心と身体を逆対応にすることを強調している。

『五輪書』や『兵法家伝書』に書かれている内容は、平和な時代ならではの緻密な理論といえるかもしれないが、現代社会にも通じることが非常に多く、武道が文化として成立してきた原点がこのあたりにあるといえそうである。

活人剣思想

剣術の文化性ということで考えた場合に重要なものとして、新陰流の活人剣思想というものをあげることができる。

これはどういうものかという、武術自体は人を殺傷するものであって悪いものである。しかし万人を苦しめている悪人がいたとすると、この悪人一人を武をもって殺すことは万人を活かすことにつながる。つまり人を活かす剣であるという理屈である²⁵。

²³ 魚住孝至は、藩主細川忠利は柳生宗矩の古くからの高弟であり『兵法家伝書』を武蔵来訪の三年前に授けられていることから、忠利が武蔵との会話の中で『兵法家伝書』の内容について触れていたかもしれないことを指摘し、「武蔵は、宗矩何するものぞとの思いを胸に秘めていたかもしれない」という穿った意見を述べている。

魚住孝至『定本五輪書』人物往来社、平成 17 年（2005）

²⁴ 『兵法家伝書』では心^{こころ}を更に細分化して神・心^{しん}・気^{しん}という概念を設定する。心は何かにつまみつかれて止まってしまうと病になるので自由に動かさなくてはならない。しかしただ心を自由にさせると無秩序になるのでこれをコントロールするものが必要であり、それを「神^{しん}」という。そして更にこの心が気を召し使うという。つまり「神→心→気」という関係性が成り立つ。そして最も中心となる「神」を「神妙剣^{しんみょうけん}」と称する腹（臍の回り五寸四方）に据えるという。

²⁵ 『兵法家伝書』殺人刀の冒頭に以下の記述がある。

古^{いにしえ}にいへる事あり、「兵は不祥^{ふしょう}の器なり。天道^{てんどう}之^{これ}を悪む。止むことを獲^えずして之^{もち}を用ゐ

武力というのは敵の武力を止めるものであるといった理論と共通するものがある。

柳生宗矩は幕府の要職にもつくものでもあり、幕府の中にある為政者でありながら剣の技術を追及するということはどういうことかということを実に重く考えた新陰流の理念である。

この活人剣という語は、禅の用語である。

武道における二つの心 — 禅と儒教の影響

特に剣術と禅は非常に関係が深い。その代表的なものが新陰流である。先にも取り上げた『兵法家伝書』の著者である柳生宗矩は、禅僧である沢庵宗彭たくあんそうほうから大いに影響を受けたといわれている。沢庵が著した『不動智神妙録』ふどうちしんみょうろくと『兵法家伝書』はその内容に共通するものが多い。『不動智神妙録』とは、沢庵が柳生宗矩に与えたもので、禅の立場から剣術における心の問題を説いたものである。

近世剣術において心の問題は解決すべき最重要課題であった。何故なら剣術というのは次の瞬間に自分が死んでいるかもしれないという生死の境を前提としているため、心の身体に与える影響が日常よりも切実な問題であったからである。

剣術と禅の関係には二通りの関係がある。剣術家が必死の思いでつかんだ心境を文章上表現するのに禅の言葉を使って説明する場合と、剣術家が禅の修行方法を援用して剣の修業をして極意をつかんだ場合である。両方あったと考えてよい。

しかし武道における心の問題で特筆すべきはもう一つある。それは『不動智神妙録』の最後の部分で沢庵が宗矩に対して日常の言行を戒めていることに表れている。敵と対峙したときの心の問題とは別に、日常の心を問題にしているのである。剣術では、この日常の心を剣の修行を通して養っていくことを強調する。ここが武道の文化性の最たるものである。

なぜこういった一見不自然な展開をしたのであろうか。

武術を修行するのは武士である。武士はこの時代、単なる戦闘員ではなく国を治めていく為政者でもある。乱世であれば人を斬る技術に長けたものが重宝されたが、治世においてそれだけでは単なる乱暴者であり、人の上に立つべき人格を備えていることが要求された。人の上に立つべきエリートとしての素養である。それゆえに日常における心の問題が説かれていたのである。現代武道における人間形成の理論につながっていくものである。いわゆる倫理や道徳に係わる心の問題であるが、実はこの心は儒教と大に関係する。徳川幕府は朱子学を官学として正式に採用するなど儒教を重く用いて、道徳規範を安定させようとした²⁶。

武道に係わる心は二つあり、敵と対峙した際の心には禅が大いに影響を与え、倫理・道徳的な心には儒教が関係したということである²⁷。

る、是れ天道也」と。 —中略— 一人の悪をころして万人をいかす。是等誠これらまことに、人をころす刀かたなは、人をいかすつるぎなるべきにや。

²⁶ 「徳川幕府は武士を儒教の檻の中に入れた」と述べる学者もいる。

²⁷ 中林信二は、前者の心を芸道的・求道的精神性といい、後者を倫理・道徳的精神性としている。

中林信二『武道論考』中林信二先生遺作集刊行会、昭和 63 年（1988）

しかもそれを武の技術の修行を通して行う。技術のことは技術のこととして、心のことは心のこととして別々に考えるようなことはしない。日本の武士はあくまでも心の問題と技術の問題をセットにして取り扱った。これを「心身一如」といった。

武士の嗜みとしての武道

武士にとって武道は身につけておかななくてはならないものであった。それは武士が本来戦闘員であったということとは別に、上にも述べたように日常の倫理・道徳的な精神を養うものであったからである。

江戸幕府においては、その下部組織として藩^{はん}という行政組織があった。各々の藩はその子弟の教育機関として藩校^{はんこう}というものを設けた。いわば公教育の学校である。

有名なものとしては水戸藩^{みと}の弘道館^{こうどうかん}、荻藩^{はぎ}の明倫館^{めいりんかん}、鳥取藩^{しゅうとくかん}の尚徳館^{しょうとくかん}などがあげられる。

藩校における教育内容は各藩によって様々であったが、多くの場合が文武両面の教育を行っていた²⁸。文教育は儒学を中心に行われ、武の教育としては兵学・剣術・槍術・馬術・弓術・柔術・砲術などが行われていたが、言うまでもなく剣術が中心として教育されていた。

江戸時代すでに、公教育の場で武道が取り扱われていたということである。

これは心のありかたを重視した武道の人間形成としての機能が大きく関係していることは言うまでもない。

しない打ち込み剣術の登場

近世中期までの剣術は、先にも述べたように形による約束稽古であった。しかしこれがまさしく形だけのものになり、実戦性、実用性から遠ざかっていくのは自然の成り行きである。

当然のことながら志を高く持った人々はこれに疑問を感じていた。そこで登場したのが、防具（剣道具）をつけてしないをもって自由に打ち合う「しない打ち込み稽古」である。

この当時使われていたしないは「袋しない」といって、竹の先を細かく割ってこれに革の袋をかぶせて作ったものである。

剣道具の歴史については不明な点も多いが、延宝年間（1673～81）頃には様々な流派で部分的に使用されていたといわれ、それを正徳年間（1711～16）に直心影流^{じきしんかげりゅう}の長沼四郎左衛門^{くにしと}国郷^{めん}らが面^{めん}・小手^{こて}・胴^{どう}・垂^{たれ}の四つをセットで使うようになったといわれている。さらに宝暦年間（1751～64）に中西忠蔵^{つぐたけ}子武^{しぶ}が一刀流で使用するようになると、急速に世に広まった。その後、工夫改良が加えられ天保年間（1830～44）には今日のような形の剣道具が完成したといわれている。

²⁸ 水戸藩第九代藩主であった徳川斉昭^{なりあき}が、藩校弘道館を設立するにあたり、その建学の精神を記した「弘道館記」（天保9年、1838）に「文武不岐」（ぶんぶわかれず）のことが記されている。

いっさいちやうざん 佚斎樗山「猫の妙術」 一生涯武道一

近世中期において注目すべき文献として、佚斎樗山²⁹の「猫の妙術」³⁰がある。享保 12 年（1727）に著されたものである。

武道の日本的技術観を窺い知ることのできるもので、その深遠さを寓話形式で表現している。山岡鉄舟が座右の書としていたことでも知られ、現代においてもこの書を好んで読む武道家は多い。

『莊子』（達生篇）「木鷄」の話が原型となっているといわれている。具体的な内容としては、鼠退治の話であり、若い気鋭の猫から段々と大きく年を重ねた猫が登場し、最後は年老いた古猫が最も優れた業前を披露する。幼少・若年から熟年・老年に至るまで、「技術」→「気」→「和」→「無心」と段階において求めるものが変わり、最終的に無物となってまるで木の猫のようになる。以上のような話である。

これは一生を通じた修行の中で、求める課題が段々と深化していく様を描いており、まさに「生涯武道」を論じた書と言える³¹。深い課題が年齢を重ねるごとに次々と現れるため、一生これを飽くことなく追い求め続けることができる。ここに武道の特徴があり、本書ではそれを古猫に語らせているとも理解できる。

また、この書の特徴は、読むほどに理解が以前より深まっていることであり、まさに生涯を通して学び続けることのできる良書といえる。

本書が書かれた時代は既に泰平の世であり、平和な時代に書かれた武術論であることにも注意しておく必要がある。

しない打ち込み剣術の隆盛

しない打ち込み剣術は、流派をこえて大変に栄えた。

お互いに自由に打ち合うことができることから競争心をあおり、また面白みも多くなってくることから自然と盛り上がりを見せいった。

また剣道具をつけて行われるしない打ち込み剣術はある程度の安全性が確保されているため、長らく禁止されていた他流試合が解禁となり、このことが流派間の交流をうながして全体として栄えていった。

真剣や木刀による他流試合は相手を殺傷するものであったため必ず遺恨を残すことから、幕府は長らく他流試合を禁止していた。これが解禁になったのは、一説によると天保年間（1830～1844）であったといわれている。しない打ち込み剣術の登場が他流試合解禁のきっかけとなり、この解禁が今度はしない打ち込み剣術の隆盛に影響を与えた。

江戸時代中期から後期にかけては、しない打ち込み剣術による試合稽古に秀でていた流派が随分と隆盛した。伊庭是水軒秀明^{いばぜすいけんひであき}が創始した心形刀流^{しんぎょうとう}や中西忠太^{なねさだ}子定^{こさだ}が初代

²⁹ 本名を丹羽十郎左衛門忠明といい、関宿藩の藩士で、仏教・儒教・神道に詳しく、また老荘・禅に造詣が深かったという。「猫の妙術」に続き、天保 14 年（1729）にこれも樗山の代表作である『天狗芸術論』を著す。

³⁰ 『田舎莊子』全十巻のうちの一章で、道家（老荘）思想の啓蒙書ともいわれる。

³¹ 『壮士』の「木鷄」において紀省子という訓練士が育てた最強の闘鶏はわずか 40 日で完成している。「猫の妙術」が語る幼少から老年まで長く生涯にわたっての修練を経て極意を修得していくような「生涯武道」の意識は、原型の中国思想より強いといえる。

である中西派一刀流、千葉周作^{しげまさ}成政が興した北辰一刀流、逸見太四郎義年が流祖である甲源一刀流、福井兵右衛門嘉平^{よしひら}が流祖である神道無念流、山田平左衛門光徳^{みつのり}が流祖の直心影流、桃井^{もものい}八郎左衛門直由^{なおよし}が流祖の鏡新明智流などがあげられる。

江戸三大道場

天保年間（1830～1844）から安政年間（1854～1860）にかけて、当時の日本の首都ともいえる江戸では町道場が大いに栄えた。

剣術を含めた武芸は本来武士が行うものであり、町人や農民が行えるものではなかったが、この時代そういった決まりが効力をもたなくなってきた。武士でないものが剣術を行うようになってきた。そういった事情から、禄（給与）の安い下級武士や武士以外の身分のものが剣術を習い、そしてこれを教えて生計を立てるようになってくる。これが町道場といわれるものである。

特に江戸の三大道場といわれるものがあつた。

先ずは北辰一刀流の千葉周作^{しげまさ}がやっていた「玄武館」^{げんぶかん}。門弟は3600人もいたといわれている。門弟の中には有名な坂本竜馬^{さかもとりょうま}もいた。千葉周作は中西派一刀流を学び、天下の一刀流の系統を継ぐものである。現代剣道に技術的に与えた影響は大きい³²。

二つ目は、神道無念流の斉藤弥九郎^{さいとう やくろう}がやっていた「練兵館」^{れんべいかん}である。門弟には日本を明治維新へとつき動かした高杉晋作^{たかすぎんさく}や桂小五郎^{かつらごろう}などがいた。

三つ目は、鏡新明智流、桃井春蔵直正^{もものいしゅんざうなおまさ}の「士学館」^{しがくかん}である。

以上の「玄武館」「練兵館」「士学館」を江戸三大道場といい大いに栄えた。

その他に、後に講武所の剣術師範になった直心影流^{じしんかげりゅう}の男谷精一郎^{おだにまいるろう}がやっていた男谷道場、心形刀流^{しんぎょうとうりゅう}の伊庭軍兵衛^{いばぐんべえ}がやっていた道場も有名であった。

剣術の競技化 一大石進事件

形の稽古では実戦性が薄いということで登場した「しない打ち込み剣術」であるが、これが時間の経過とともに実戦からはなれ競技化していくことになる。

江戸時代後期には、他流試合が解禁となり諸国をまわって腕試しをする武者修行を行うものが増えて、よりこの競技化に拍車がかかることになった。

有名な話が、大石進種次^{おおいし ねつじ}の武者修行である。

大石進は、現在の福岡県にあたる柳河藩の武術師範であった。彼は神陰流の剣術と大島流の槍術の先生であった。天保3年（1832）と天保10年（1839）の二回にわたって江戸に武者修行にやってきた。大石は5尺3寸（160 cmほど）のしないをつかった。その後、講武所で定められた竹刀の長さは3尺8寸（115 cmほど）であるからいかに長かったかがわかる。大石は、それまでつかわれていた「袋しない」では長さがあるためしなりすぎることから、四本の竹を組み合わせる現在の竹刀と同型のものを考案した。大石は大男であったというが、長身から長竹刀をつかって繰り出す片手での突き技で、江戸の名だたる師範たちをことごとく打ち破った。当時その実力から高名であった男谷精一郎との試合は有名である。男谷は、一回はこの突き技をかわしたが、翌日にはさらに工夫をした大石にことごとく突かれたという。大石は槍の師範でもあったため突き技が得意であった。こうい

³² 千葉周作は、しない打ち込み剣術の技を「剣術六十八手」として体系化した。

た技術は、当時センセーショナルであったことに間違いない。この大石の活躍により江戸で長竹刀が大いに流行した。

現在の剣道の足遣いはこの時にできたものと思われる。長竹刀を持って右手右足を常に前にして突く、あるいは打つにしても突くように小さく打つ技術が流行し、それに伴って従来の左右の足を交互に踏み出す歩み足から、常に右足を前にして左足を引き付ける送り足、踏み込み足が行われるようになったと考えられる³³。

しかしこの大流行した長竹刀の技術が、日本刀の技術からかけ離れたものであることは確かである。試合偏重の競技化と考えるとよい。

三十三間堂の通し矢競技

武術の中で最も早く競技化したのは弓術である。

江戸時代、藩対抗の一大イベントにまでなり、大変に盛り上がっていたものとして「さんじゅうさんげんどう三十三間堂の通し矢競技」というものがある。

これは京都にあるれんげおういん蓮華王院という寺院の軒下を、端から端まで矢を射通すことを競う競技である。この寺院の軒下は非常に長く約 120 メートルもある。軒下にある柱と柱の間に 33 あることから、通称三十三間堂と呼ばれている。この軒下は幅が約 2.2 メートル、高さが約 5 メートルしかない。従ってここを端から端まで 120 メートルもの距離を天井に当たらずに射通そうとすると、相当強い弓を引いて正確に矢を飛ばさなくてはならない。現在ではこれを射通せる人は少ないといわれている。

伝説によれば、平安時代後期（保元年間 1156-1159）に熊野のかぶらざかげん た蕪坂源太という人が始めたとされているが定かでない。競技としては、慶長 11 年（1601）あさおかへい べい え浅岡平兵衛が 51 本射通した記録が最初であり、それから慶応 2 年（1866）まで約 250 年間もの長きにわたって行なわれていた。あまりの盛り上がりから、京都のみならず東京にも同様の施設をつくって競技が行われていた。

競技形式には色々あったようであるが、最高の華であったのが「ぜんどうおおやかず全堂大矢数」といわれるもので、矢数に制限を加えず 24 時間ぶっ続けで射つづけ、射通せた数を競うというものであった。

じょうきよう貞享 3 年（1886）に優勝したわ さ だいはちろう和佐大八郎という人は、24 時間で 13053 本の矢を引いて、そのうち 8133 本を射通したという。単純に計算しても 6.61 秒に一本矢を引いたことになる。しかし途中で休憩もし食事もしたであろうから、もっと短い間隔で矢を引いていたことになる。

射法も特殊で、小さな腰掛に腰をおろして膝組みの姿勢から矢を射る。天井に矢が当たると失敗になってしまうため、上の空間を広くとるための工夫である。

競技者も藩の威信をかけて戦っていたため相当激しい訓練をつんだようである。また競技者だけでなく、矢を選定する人、記録員、判定員、応援要員、弓職人、照明係などが随

³³ 堀正平は、以下のように述べている。

足遣ひの変化、柄が八寸以内の竹刀の時は、常に歩む通りで宜かつたが、長竹刀になると柄も随つて長く一尺三寸許りにもなつたので、歩んだのでは構へが動揺する、夫れを動かすまいとすれば窮屈であるから、形の様に進んだのを止めて、右左と順に運ぶ様に変つた。

堀正平『大日本剣道史』体育とスポーツ出版社、昭和 60 年（1985）

行し、膨大な費用を費やして藩をあげて取り組んでいた。

これに優勝したものは藩の英雄であり、社会的・経済的に優遇された。もはや敵と戦う武術ではなく明らかに競技である。

講武所

江戸時代、徳川幕府は例外を除いて外国との交流を絶っていた。内戦もほとんどなく平和な時代が 260 年以上も続いた。そのことによって武芸は文化として成熟し、人間形成としての意味も含むようになり、また競技としても行われるようになっていった。

しかし、幕末になるとペリー率いるアメリカ東インド艦隊が開国を迫って来航するなど、外国からの圧力が強くなった。幕府は危機感から武備に関する改革をはじめ、その一環として武術訓練の場として講武所を開設した。

講武所においては戦場での必要性から主に剣術・槍術・砲術が重視された。砲術は洋式砲術の調練であり、剣術と槍術はもっぱら試合稽古が中心であった。指導者も家柄よりも実力を重視して選抜された。例えば剣術の指導者として直心影流の男谷精一郎や田宮流居合剣術の窪田清音^{くぼたすがね}などが抜擢されたが、柳生家や小野家などの将軍剣術師範としての家柄の者は登用されなかった。

また剣術において競技化の契機となった長竹刀を規制すべく、講武所で剣術部門のトップにいた男谷精一郎は竹刀の長さを 3 尺 8 寸と定めた。この長さは日本刀の長さ（3 尺 3 寸(約 100 c m)程度）を想定したもので、なおかつ防具を着用し小手をつけて柄を握ることから真剣より少し長めに定めたという。実戦を意識した長さの設定である。また、ある程度の長さで重さのあるものを使用しての鍛練的効果を期待してのものであったともいう。

講武所において試合稽古ばかりが行われたことにより、それまで歴然とあった流派間の壁は取り除かれお互いの交流が進んだ。このことは明治維新以降、特に剣術が統一されていく一つのステップになったと考えられる。

しかしこういった努力もむなしく、徳川幕府は崩壊し明治維新をむかえ、日本は近代に進んで行く。

近・現代の武

武士階級の崩壊と武道の危機

明治維新以後、明治 4 年（1871）の廃藩置県により幕府の下部行政組織であった藩がなくなり、それまで藩から給料をもらっていた武士は失業してしまう。徳川幕府の中では士・農・工・商という階級制度があったが、これがなくなり武士階級自体が消滅してしまった。日本の歴史の中で長く政治をおこなってきた武士が存在しなくなってしまったということである。武芸を生業としていた武士階級が崩壊したことにより、武道（武芸）の存続が危ぶまれる事態となった。特に明治 9 年（1876）の廃刀令により日本刀を携行することが禁止され、剣術自体が成り立たなくなった。それにともなって剣術によって生計を立てていた剣術家も失業状態になった。

また戦いの技術としては、西洋諸国は既に優秀な火器を大量に使用しており、それまでの武芸などは戦の技術としては無用のものとなった。

日本武道最大の危機であった。

撃剣興行

こういった武道の危機を救おうと、元講武所の剣術師範であった榊原健吉という人物がユニークな発想をする。剣術を興行として行おうというのである。これを撃剣興行という。

剣士に勝敗を競い合わせ、これにお客を集めて見物させお金を取ろうというのである。試合の方法は、相撲のように土俵をつくり四本の柱を立てて、東西に出場する剣士たちがわかれ、呼び出しが呼び出すと中央で試合を開始するといったものであった。

最初にこの撃剣興行が行われたのは明治 6 年（1873）4 月 11 日から 10 日間である。これは大成功に終わった。その理由として考えられるのは、それまで一般庶民には縁が遠かった剣術の試合を入場料さえ払えば見ることができたということ、そして出場選手が有名剣士ばかりであったということがあげられる。

この興行の成功から次々と撃剣興行を行う者があらわれ、明治 9 年（1876）頃には、東京市内だけで 20 ヲ所余りもあったという。そうすると、観客を集めるために曲芸のような技を使ったり、芝居じみた演出をしたりするようになり、自然と人気を失っていった。

この榊原健吉が撃剣興行を行ったことに関しては、賛否両論ある。

賛成するものとしては、失業状態にあった剣術家が生活の糧を得ることができたという点、絶滅の危機にあった剣術の命脈を保ったという点、一般庶民に剣術を紹介できたという点で良かったとする意見である。

反対に批判する立場としては、武士の誇りの象徴であった剣術を見世物にし、その權威を失墜させたという意見、あるいは剣術の技術の本質をゆがめてしまったという意見がある。

やまおかてっしゅう 山岡鉄舟の剣術修養論

こういった動きとは全く反対の動きをした剣術家がいた。山岡鉄舟である。明治という武道自体が古臭いものであるとの扱いをされる時代において、あえて精神を練磨し優れた人格を形成する修養のために剣術に打ち込んだのである。

徹底した剣と禅の修行から、伝統的な武芸の精神論を発展させた。明治 13 年（1880）に無刀流^{むとうりゅう}という流派をつくり春風館^{しゅんぷうかん}という道場を開いた。こういった時代にもかかわらず門人は 401 名にも及んだ。

彼の春風館では非常に激しい稽古が行われた。有名なのが立ち切り稽古である。一人が代わる代わるかかってくる相手と稽古を続けるというものである。この荒稽古には三段階あり、最初の段階では朝から晩まで一日 200 回の立ち切り稽古をするというものである。次の段階では 200 回の立ち切りを三日間、最終段階ではこれを一週間やりぬくというものである。現在でも日本では三時間立ち切り試合というものが各地で行われているが、これらは山岡鉄舟の荒稽古を真似してのものである。生きるか死ぬかのような極限状態で発見するものがあるという。結局のところ心の問題であり、これが人間的な成長につながるであろう。鉄舟は「心の外に刀は無い」（心外無刀）ということを用いる。これは無刀流という流派名の由来でもあるが、彼にとって剣術は刀の操作ではなく心を磨くものであった。

鉄舟は明治 21 年（1888）に亡くなる。その後、全国規模での試合が行われるようになる

と、試合場面での無刀流は評価を落としていったことも事実である。

しかしいずれにせよ、山岡鉄舟は近・現代において修養論として武道をとらえた最初の人であり、現代剣道の人間形成としての教育論に大いに影響を与えた人物である。

嘉納治五郎の柔道が主導する近・現代の武道

弓が中世前期の武を主導し、剣が近世の武を主導したことは既に述べたが、明治維新以後の近・現代の武を主導してきたのは柔道であるといつてよい。

そしてキーパーソンとなるのが嘉納治五郎である。嘉納治五郎とは近世までの柔術を現代風にアレンジして講道館柔道を作り上げ、現在に見る隆盛の基礎を築き上げた人物である。

嘉納は万延元年（1860）に生まれ、幼少より身体が虚弱であったという。この劣等感から小さな身体の中でも大男を投げ飛ばすことができるという柔術に興味をもち、修行をはじめ。近世の柔術の特徴は「柔能制剛」（柔よく剛を制する）といい、大きく剛健な者を、小さな者が柔らかく対応して投げるということである。嘉納はこれに惹かれて柔術を始めた。

最初、天神真楊流^{てんじんしんようりゅう}という流派の柔術を習い、次いで起倒流^{きとうりゅう}を学んだ。この柔術の修行の中で彼は三つの発見をしたという。それは、体力増強に非常に効果があったということ、精神的にも非常に効果があったということ、そして勝負の理法を実生活に応用できるということ、この三つである。更に彼はこの発見から、時代に相応しいものに再編すれば青少年の教育上価値の高い教材になると確信するにいたる。そして人の道を講ずるところという意味で「講道館」という柔道を創始した。

嘉納の面白いところは、身体的劣等から柔術をはじめ、激しい修行で実力をつけた後に武術家としての強さを前面に出していくのではなく、柔術の教育的価値に気付いて教育者として活躍するところである。実際に学習院の教頭や熊本第五高等学校長、東京高等師範学校の校長などを歴任する。

そして嘉納は、自分の創始したものはそれまでの「柔術」とは違って遙かに深い意味をもつものであるから、区別する意味で「術」ではなく「道」の語を使用し、あえて「柔道」とした。この「道」という語は、体育（筋肉を適当に発達させ、身体を壮健にし、身体四肢の動きを自由にする）、勝負（実戦の勝負にかかわること）、修心（生活倫理・道徳にかかわること）にわたる人間教育を意識しての使用であるという。

彼の考え方の特徴は、柔道を人間教育の問題として取り扱ったところである。

さらに嘉納は大正 11 年（1922）に二つのモットーを掲げる³⁴。心身の力を有効に利用するという意味の「精力善用」と、自他共に満足を得ることが大切であるという道徳的意味を含んだ「自他共栄」である。嘉納以前の柔術が「柔よく剛を制する」という極めて技術的なことを標榜していたのに対して、いたって社会性を考慮したモットーであるといえる。

嘉納はアジア初の国際オリンピック委員などもし、近代オリンピックの父といわれるピ

³⁴ 嘉納治五郎は、これよりも前の大正 4 年（1915）に柔道の定義を定めている。

「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は攻撃防御の練習によって身体精神を鍛練修養し斯道の真髓を体得することである。そうしてこれによって己を完成し世を補益するが柔道修行の究竟の目的である。」

エール・ド・クーベルタンと親交が深かった。こういった人たちとの関係から、西洋的な思想の影響を受けてこういったモットーを作り上げていったのであろう。

明治という西洋のものが全て新しく見え、近世以前の武術などかえりみられないような時代であって、これを当時の時代にあった形に焼き直しをし、そしてなにより教育の中に位置付けたところに、嘉納治五郎という人物の最大の功績がある。

嘉納治五郎の女子柔道

明治・大正期の日本はまだまだ女子がスポーツましてや武道をやることなど憚られる時代であったが、嘉納治五郎は女子が柔道をやることについて寛容であり、「柔道は女子も大いにやるがいい」と言ってむしろ勧めている。

その始まりは、明治 26 年（1893）に芦屋スエ子が嘉納の弟子であり講道館四天王³⁵の一人であった富田常次郎に申し出て、嘉納の自宅庭で富田が指導したのが始まりといわれている。この時、下田歌子や嘉納の妻である須磨子らも一緒に稽古した。

講道館に女子部が創設されるのは大正 15 年（1926）のことである。昭和 9 年（1934）の鏡開き式で正式に女子部創設が発表された。この際に役員が任命され、同時に 3 名が有段者となった。

嘉納は女子の指導に関しては細心の注意を払っていたようである。男子以上に基本を正しく守らせ、形と乱取を併行して指導し、試合は勝とうとすると基本を崩す恐れがあるとして禁じた。入門も家柄や出自を考慮していたため、当初は上流階級の子女が多かった。

嘉納は晩年、「女子の柔道はわしの柔道の理想に最も近い」と言い大いに期待していたようであり、また国際化を見据えて「女子の柔道も今後とも世界的に発展するのであるから英語をしっかりと勉強しなさい」と言っていたという。その意志を継いで福田啓子は、アメリカ・オーストラリア・フィリピン・フランス・カナダ・ノルウェーなど世界各地で普及指導した。

大日本武徳会の設立

明治 28 年（1895）に武道の統括団体として大日本武徳会が創設される。

大日本武徳会は、武道の奨励・普及・指導・大会の開催・武道家の表彰などの事業をおこなった。明治 32 年（1899）には平安神宮境内に武徳殿が完成。明治 35 年（1902）には、一定の資格を有する者に「範士」および「教士」の称号を与え範士には終身年金を送るという武道家優遇令を制定する。明治 38 年（1905）には武道の学校教育への正課編入の見通しから、武術教員養成所を開設した。

大日本武徳会の事業で特筆すべきは統一した形の制定である。柔術においては明治 39 年（1906）に、嘉納治五郎がリーダーシップをとり他流派の意見も取り入れながら「武徳会柔術形」が制定された。同年剣術においても三本の形が制定されたが剣術家の間に不満が多く、44 年（1911）から再度、内藤高治や高野佐三郎らが係わり「大日本帝国剣道形」が制定された。これが現在の日本剣道形である。ここでの大きなポイントは、武徳会により統一形が制定されたことによって、それまで別々に存在していた流派の統合が実現したと

³⁵ 講道館四天王とは、富田常次郎（筆頭入門者）、西郷四郎（明治 15 年 8 月入門）、山下義韶（明治 17 年 8 月入門）、横山作次郎（明治 19 年 4 月入門）をいう。

いうことである。

大日本武徳会においても一つ特筆すべきは、明治 45 年（1912）に武道指導者を養成する専門学校として武術専門学校を開設したことである。大正 8 年（1919）に大日本武徳会副会長兼校長として西久保弘道が迎えらる。そこで西久保は、武術よりさらに深い意味を含んでいるとして「武術」ではなく「武道」であるということを主張し、学校名を「武道専門学校」に改名してしまった。同時に「柔術」「剣術」「弓術」という名称を「柔道」「剣道」「弓道」に変え、これの総合名称として「武道」の語を使用するようにした。武道各種目の総合名称として「武道」の語を使うように定着するのはこのあたりからである。

武道専門学校において剣道主任教授を務めた内藤高治も近代武道史において特筆すべき人物である。当時二刀の名人であった三橋鑑一郎からの求めに応じて武徳会理事であった楠正位^{しょうい}が出した「ミチノタメキタレ」という電報に心を打たれ、京都に赴いた話は有名である。明治 34 年（1901）に開催された第 6 回武徳祭大演武会で高野佐三郎と対戦した試合は、名勝負として語り継がれている。剣道の競技化を嫌い、切り返し、打ち込み、かかり稽古といった基本を徹底して行ったといい、その荒稽古の激しさは有名である。教え子としては、後の十段、小川金之助や持田盛二、斎村五郎などがある。

戦時下の武道

昭和 12 年（1937）に日中戦争が勃発し、日本全体が軍国主義に大きく傾倒していく。

剣道などには戦場での実戦性が求められ、屋外での野試合なども行われた。また、大日本武徳会では、真剣勝負を前提にして三本勝負ではなく一本勝負とし、竹刀の長さも三尺八寸から三尺六寸へと試合審判規定が変えられた。

学校教育においては、昭和 16 年（1941）に「国民学校令」が公布され、小学校 5 年生以上の男子に体錬科武道が必修となる。教授方針の第一として「体錬科ニ於テハ身体ヲ鍛錬シ精神ヲ練磨シテ豁達剛健ナル心身ヲ育成シ献身奉公ノ実践力ニ培ヒ皇国民トシテ必要ナル基礎的能力ノ練磨育成ニカムベシ」と明文化され、武道による教育において求められる人間像が軍国主義に著しく傾倒する。

同年 12 月に太平洋戦争が勃発する。

体錬科武道の実施は 5 年足らずの期間であったが、戦時下日本における軍国主義を象徴するものであり、以後武道に対する負の印象を強く与えたことは確かである。

最後の陸軍大臣であった阿南惟幾^{あなみこれちか}大將は、終戦の日の早朝「一死以テ大罪ヲ謝シ奉ル」の遺言を残して割腹自殺をするのであるが、その二日前に当時陸軍士官学校や陸軍省で剣道を指導していた斎村五郎師範に願い出て特別に剣道の稽古をしていることが報告されている。剣道の稽古により最期に心の整理をしたのであろうことは容易に予想ができる。戦時下の武道、特に剣道は、実戦の技術ということよりは、日本人特に軍人の精神面に大きく作用したものと考えて間違いないであろう。

太平洋戦争後の武道の禁止と復活

日本は、昭和 20 年（1945）敗戦により終戦をむかえる。その後、昭和 27 年（1952）まで、アメリカを中心とする連合国軍の占領下におかれる。

軍事色を一掃するということから武道は全面的に禁止され、大日本武徳会は解散させられる。

特に剣道は、戦争に加担した部分が大きいのとして厳しい対応がなされた³⁶。柔道や弓道
は、連合国軍将校たちに愛好家が多かったことなどもあって比較的好意的にみられており、
スムーズに復活を果たした。昭和 24 年には、全日本柔道連盟と日本弓道連盟が結成された。
これに対して剣道は復活するのに相当苦勞した。まずは剣道としてではなく「しない競技」
として活動を再開する道をとった。「しない競技」とは、フェンシングなどを参考にしてル
ールや用具などを工夫し、スポーツ的なイメージを前面に出したものである。

「しない競技」とは以下のようなものであった。

- ・使用する「しない」は、従来の四つ割の竹刀ではなく、竹の先を細かく割り、それに布
や革の袋をかぶせた「袋しない」を使用した。
- ・防具は軽装なものを使用する。
- ・稽古着・袴ではなくズボンとシャツを着る。
- ・競技は一定区間内で行う。
- ・競技は、一定の時間内に多く得点したものを勝ちとする時間制を採用する。
- ・反則を定め、反則を犯した者には罰則を加える。
- ・足がらみ、体当たりの禁止。
- ・三人の審判をおき、多数決で得点の採否を決める。

こういった工夫をほどこした上で、先ず昭和 25 年（1950）に全日本 掬 競技連盟が結成
され、次いでサンフランシスコ平和条約が発効した年である昭和 27 年（1952）に全日本剣
道連盟が結成される。昭和 29 年（1954）に全日本掬競技連盟は全日本剣道連盟に吸収され
消滅していく。

その後、復活を果たした日本の伝統的な武道は競技として、あるいは公教育の場にも定着
していく。

新しい武道の誕生と導入

現在武道として行われているものには、江戸時代以前からの伝統をもつものと、近・現
代になってから誕生したもの、あるいは海外から導入されたものがある³⁷。

近・現代になってから誕生したものとしては、先ず合気道がある。合気道^{あいきどう}の開祖は植芝^{うえしば}

³⁶ A 級戦犯 最期の剣道一 地福義彦氏、聞き書き

地福義彦氏は、大正 3 年（1914）11 月 4 日生まれである。警視庁で助教をされるなど剣
道の専門家としての道を歩んでこられ、昭和の剣聖といわれた持田盛二先生の愛弟子であ
り、剣道復活後の第 2 回全日本剣道選手権大会に出場するなど、剣の腕前では相当に名の
知られた方である。以下、氏の談である。

巣鴨刑務所に行けと言われて防具を担いで行ったら MP がいて、中に入れと言われた。中
にカマボコ兵舎があって、兵舎の中はきれいな板張りになっていた。そこには刑の執行を
間近にひかえた A 級戦犯の人たちが、向こうに東条英機ほか十数名いたと思う。その前で
別の警察機関から呼ばれてきた人と剣道の試合をした。彼らが絞首刑になる前に剣道の試
合が見たいと GHQ に所望したためだという。試合は小手をとって地福氏が勝った。試合
の後、東条英機とは握手をしてもらった。戦後、日本がアメリカを中心とした連合国軍の
占領下におかれ、剣道が GHQ の民間情報教育局（C I E）の指示のもと禁止されていた
時代のことである。通常では考えられない、驚くべき、知られざる昭和剣道史と言える。

³⁷ 日本武道協議会加盟競技団体

柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道（計 9 団体）

盛平^{もりへい}（1883～1969）である。投げ技、関節技などを中心とするが、通常試合は行なわず主に形による練習に終始している。植芝盛平は、明治・大正・昭和と生きた天才武術家、大東流の武田惣角^{たけだそうかく}（1860～1943）³⁸に一時師事した。

次に少林寺拳法をあげることができる。宗道臣^{そうどうしん}（1911～1980）が、自らが中国大陆において学んだ拳法をもとに工夫し、太平洋戦争後の昭和22年（1947）に創始したもの。突き・蹴り・関節技を中心とする。中国少林寺の武術とは同名であるが直接関係はない。

海外から導入されたものとしては銃剣道がある。銃剣道は、剣道具に似た防具をつけて木製の銃剣を模した木銃を使い、決められた部位（左胸部と喉）を突きあう競技である。フランスから伝来した洋式銃剣術に日本の槍と剣の技術があわさって出来たという説明がされている。

その他に日本の武道として認識されているかどうかは疑問の残るところであるが、中国武術である太極拳^{たいきょくけん}なども広く行なわれている。太極拳は、現在は敵を倒す武術というよりは健康増進をはかるいわゆる養生的な性格をもつものとして普及している。その歴史には謎が多かったが、近年、武道学の優れた研究³⁹により明らかになりつつある。

現代グローバル社会における武道

日本発祥の武道は、現代グローバル社会においてもはや日本だけのものではなく、世界中に普及され、各々の文化の中で発展している⁴⁰。

武道が世界に出ていった時、各地の文化的な背景から、日本国内では想像できなかった

³⁸ 今ト伝ともいわれた武田惣角は、敵の力を無にしてしまう合気という技術を発明し技法を体系化して大東流合気武術を創始した。武田惣角の高弟に佐川幸義（1902 - 1998）という不世出の武術家があり、合気の技術を継承し発展させた。武田惣角は定めた道場はもたず全国を廻って指導したが、弟子で惣角と共に各地を指導したのは佐川幸義ただ一人である。佐川は昭和29年（1954）1月に武田惣角の長男・宗清と三男・時宗の推挙により大東流合気武術第36代宗家となる。その後、昭和31年（1956）1月に武田時宗と念書を交わし、家督としての宗家は武田家に返上して、自らは合気の術を継承する者という意味の「宗範」となる。その後、合気の技術は佐川派大東流において継承されている。

³⁹ 屈国鋒：養生武術の形成過程に関する研究－民間武術から太極拳への変遷を中心に（筑波大学大学院・平成19年度博士論文）

⁴⁰ 以下のように各競技における国際的連盟も組織され活発に機能しつつある。

国際柔道連盟：International Judo Federation (IJF) 1951年設立

国際剣道連盟：International Kendo Federation (FIK) 1970年設立

国際弓道連盟：International Kyudo Federation (IKYF) 2006年設立

国際相撲連盟：International Sumo Federation (ISF) 1992年設立

世界空手連盟：World Karate Federation (WKF)

1985年に世界空手連合がIOCに加盟

1993年に世界空手連合から世界空手連盟に改称

国際合気道連盟：International Aikido Federation (IAF) 1976年設立

少林寺拳法世界連合：World Shorinji Kenpo Organization (WSKO) 1972年設立

国際なぎなた連盟：International Naginata Federation (INF) 1990年設立

銃剣道：国際銃剣道連盟を設立する事業計画がある

反応がみられ様々な事態が発生している。

まず、武道の教育としての機能についてストレートに受け入れられにくいということがある。教育の機能が精神へのはたらきかけであり人間形成を目的とすることは言を俟たない。日本において各武道種目はいずれも人間形成を謳っており、我われはこの武道の教育的な側面を何の疑いもなく受け入れているし、これが武道の大きな特徴であると信じている。しかし、これが海外、特にキリスト教社会においては理解が難しい。彼らの文化圏では、人々の道德教育を担い人間形成に資するものはキリスト教に代表される巨大宗教である。そういった文化的・思想的背景の中で、人を投げ、竹の棒で人の頭を叩き、手や足で相手を殴り蹴るといった武道が、なぜ人間形成とつながるのか理解できないのも高所から俯瞰してみるとよくわかる。

海外で武道を教える指導者が、現地の人からなぜこの国で武道を教えるのかと問われ、日本では常套句となっている人間形成のためと答えたところ即座に拒否されたという。自分は武道の技術は習いたい日本人になりたいわけではないとまで言われたという。戦いの術であった武道が教育として位置づけられるまでには、日本において長い歴史の中で育まれた思想的な積み重ねがあったことを理解する必要がある。

次に、心と身体の関係についての考え方が全く違うということがあげられる。

既に述べてきたように、日本の武道では生死をかけた戦いの経験から、心と身体が密接にかかわっていることを自覚して、この関係を重視しつつ心と身体を一体のものとして考えてきた。これを「心身一如」（心と身体を一つの如くする）といい、日本武道最大の特徴といえる。しかし、この考え方が特に西欧において受容されにくい。西欧はルネ・デカルト以来、心と身体を別々に分けて考える「心身二元論」が思考のベースにある。こういった世界観の中で、日本武道の「心身一如」はやはり理解が難しい。

以上あげたように、武道が、キリスト教社会、心身二元論社会に入ってしまった時に、文化的思想的な摩擦があるということである。

しかし近年、武道が海外に伝わり時間を経て、また現地における指導者の努力もあって、少しずつ様子が変わってきている。

2007年に東欧ハンガリーにおいて、武道を青少年の道德教育に利用しようとする国家プロジェクトが持ち上がった。これには、1989年にはじまる東欧における革命・体制転換⁴¹により、西側から資本主義経済が急激に流入し、若者の間でお金だけが価値があるものだという思考が蔓延したことにより、道德意識が著しく低下したという事情がある。このことに対する危機意識から、既存の宗教ではなく日本伝来の武道に活路を見出そうとしたプロジェクトである。このプロジェクト自体は、その後政局がかわったことにより頓挫したが、この事例には海外において武道による教育的効果を認めるような意識の萌芽がみられる。

次に筆者が経験し、研究論文の題材としても取り扱った事例を紹介しておく⁴²。

ハンガリーのブダペストで開催されたハンガリーカップという東欧を中心に20数カ国から200人ほど剣道家が集うイベントで、剣道に関する文化講演をした際に、参加していた

⁴¹ それまでの共産主義から資本主義へと社会が大きく変わった。

⁴² 酒井利信・阿部哲史・二宮恭子・堀川峻：東欧における武道の教育力に関する研究：ユーゴスラビア紛争時における元兵士の事例を中心に、武道学研究，54(2)，2022

あるクロアチア人の武道家が積極的に話しかけてきた。その日の講演のテーマは近世初期における剣豪の心法論についてであった。彼が言うには、自分はユーゴスラビア紛争の時にスナイパーであったが、峠で敵を待ち伏せし、いざ敵兵を狙撃しようとする目の前に白いブラインドのようなものがかかったようになり撃てなくなる、今日の先生の話はそれをどう解決するかという話ですよ、興味深く面白かった、と。私は非常に困惑し、動揺もした。自分は外国に人殺しの技術を教えに来ているのか、と。私たちが平和な時代の武道をしているということをはじめて自覚した。

その後、彼を対象とした事例研究を行った。彼は、戦後、悪夢を見続け、睡眠障害を起こし、思い悩んで自殺未遂までする。精神的に相当のダメージを受けていたが、医療機関にかかることは無意味であると感じ、宗教に頼ることもせず、最終的に武道（居合）の稽古に没頭する。一晚中居合の一本目「前」を 1000 本抜くなど、非常に鍛錬主義的な稽古を続け、精神的な障害を克服し人間性を回復した。この事例は、海外において武道による教育効果が有効に機能することを示すものである。

更に興味深いこともわかった。先に武道が求める心には二つあることを述べた。一つは敵と対峙した際の心であり、もう一つは倫理・道徳的な心である。彼は、戦後すぐには武道によって得られる精神性はあくまでも実戦性（殺傷性）に関わるものであると述べていたが、それから修行を重ねて 15 年たった時に綴った回顧録では、修行の過程そのものに意味を見出すようになり、さらに倫理・道徳的な心を語り、武道を **good person** あるいは **better person** になるシステムだと述べるようになる。つまり、生死の境と近い立ち位置では、二つある心のうち前者が先に現れ、時間の経過とともに後者の人間形成につながる心が出現することがわかった。日本においては 2 つの心があたかも同時に存在しているように認識されているが、上記のように二つの心が顕現化するのに順序があるということは、平和な時代の武道だけ実践していたのではわからないことである。彼は、我われの祖である剣豪が歩んだ過程を追体験したとも考えられる。

以上、現代のグローバル社会における武道を真剣に考える示唆にとんだストーリーであるといえよう。

